

差別の認識のズレが孕む危険性

3年1組23番 森健士朗
3年2組19番 野中凧

Keyword: 「マイクロアグレッション」「差別」「認識の違い」

1. はじめに

私達がこのテーマを選んだ理由は、幼少期に中国で差別を受けた経験があり、「幼い子どもで差別の対象になるという悲惨さ」、「実際に受けた時の恐怖」を自身の経験を元に、差別をしている人、差別を見過ごしている人、差別についてよく知らない人に知ってもらい、自分と同じ経験をする子供を少しでも多く減らしたいと思ったためだ。また、SNSにて差別の理不尽さを深く感じ世界の差別の現状を知りたいと同時に不意に差別について日本人の友達と話したとき、友人との差別の認識にズレが生じていたことに気づき日本人間でもズレが生じたのに世界の人とはズレがもっと生じるのではないか、またどのように生じているのかが気になったため、この探究を始めた。

2. 序論

私達は差別が起こる理由は、相手の国についてよく知らないからであると考えた。どの国にも必ず他国にはない魅力があり、その魅力さえ知ることができれば差別を減らす事ができると考えた。そこで差別の認識について確認し、今の世界の現状を少しでも多くの人に知ってもらおうと考えた。見ず知らずのうちに差別をしてしまうのは差別に対する認識の違いがあるからだ。大東文化大学特任教授の渡辺雅之によると「マイクロアグレッション（小さな攻撃性）」はヘイトスピーチやジェノサイドにつながる。自分がこれが差別ではないと感じていても他者にとっては差別だと思われるかもしれない。そこで、国際高校を通して出会った海外の友達にSNSを通して1人ずつインタビューを行い、その意見を元に研究を進めた。それに加えて参考文献を参照し的確な情報を探した。

3. 本論

日本には差別があまり存在していないと感じていたが、現実として日本国内でも差別が存在していることが分かった。例えば、アイヌ民族に対する差別、部落差別、男女差別、年齢による差別などがある。世界に目を向けてみると、国ごとにさまざまな差別が存在していることが分かった。国際高校の留学生（アメリカ、台湾、中国、ドイツ出身）へのインタビューを通して、外国における差別を分析した。インタビューでは、①差別についてどう思うか、②差別を受けたことがあるか、③あなたの周りで差別を見たことがあるか、の3項目の質問した。

①	<ul style="list-style-type: none"> ・差別は無意識に起こりうる ・心身に不快感を与え、ひどい場合いじめに発展する ・先入観を持たせ、多くの争いや紛争をもたらす
②	<ul style="list-style-type: none"> ・ある。私のライフスタイルや性的思考を家族が理解してくれない ・学業以外のことに専念する生徒に「悪い子」のレッテルを貼る風潮がある
③	<ul style="list-style-type: none"> ・原住民族差別 ・男女差別

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・同性婚などのジェンダー差別・ 過ぎによる差別被害があるかもしれない |
|--|

インタビューの結果より、日本でも起こりうる差別もあれば、その国でしか起こりえないような差別があった。これにより、国によって差別の認識の違いがあり、それが争いなどを生む元凶だとわかった。相手を深く理解できていないことで差別を起こすのかもしれない。

これらの調査、インタビュー結果を踏まえ、たてにつながる交流会で後輩や同級生に日本で起こっている差別は勿論、世界中の差別の現状を知ってもらう事ができた。また自分の経験談だけでなく、国際高校に通う留学生や国際高校を通して出会った海外の高校生を含む計13人の経験談も交えて発表したことにより、多くの人々が知らなかった海外での差別についてのプレゼンテーションができた。発表の中で他の生徒達にあなたが思う差別とはどのようなことであるか問いかけた。何度もプレゼンテーションをし、その問いに対する皆の意見や考えは私たちの調査に大きな影響を与えた。様々な視点からの意見は、幼い頃から多様性を尊重する姿勢を育てることと、個々の差別への関心を向上させることが大切というこれからの課題に気づかせてくれた。

私たちが行ったインタビューやプレゼンテーションから得られた意見やフィードバックを元に、いくつかの共通点が見えてきた。まず、多くの人が無意識のうちに差別的な言動を行っている可能性が高いという点だ。特に日本では、外国人に対する「マイクロアグレッション」や偏見が、日常会話の中で現れることがあり、そうした言葉が差別として認識されないまま続いている現状があることがわかった。例えば、「外国人だから日本語が分からないだろう」という思い込みや、「どこの国から来たの?」という質問が、相手にとっては不快な差別と感じられる場合があるという指摘があった。また、世界的な視点では、差別の根本的な原因として、文化的な無知や誤解が大きく関わっていることが明らかになった。私たちのインタビューでは、多くの海外の友人が、自分の国の文化や宗教に対する理解が浅いことが原因で、他国で差別を受けた経験を語ってくれた。このことは、相手の背景や文化を理解しようとする姿勢の重要性を再認識させてくれた。

興味深いことに、日本人の友人たちとの「差別」の認識のズレも、プレゼンテーションやディスカッションを通して浮き彫りになった。特に、日本では「差別」という言葉が、国際的な文脈とは異なる意味合いで使われることが多く、外国人に対する偏見や排除が「差別」として認識されないケースが多いことがわかった。この「認識のズレ」を解消できれば、外国人や外国にルーツを持つ人も日本で過ごしやすくなるのではないかと考えた。

4. 結論

私たちの探究を通して、差別の問題は決して一部の人だけのものではなく、誰もが影響を受ける可能性のある普遍的な問題であることを再確認した。差別は、無意識のうちに行われる場合も多く、その認識のズレがさらに問題を複雑にしている。しかし、相手を理解し、対話を深めることで、差別を減らす一歩を踏み出せるはずである。

私たちは、この探究を通じて得た知識や経験を活かし、これからも差別に対する理解を広める活動を続けようと考えている。今後の探究として、私たちはさらに多くのインタビューを行い、差別に対する認識の違いやその背景にある文化的な要因をより深く追求していきたいと思う。また、学校内でのプレゼンテーションを継続し、差別に対する理解を広める活動をさらに発展させていく予定だ。具体的には、SNSを活用した情報発信や、他校との連携を通じて、より多くの人々に差別について考えるきっかけを提供したいと思う。さらに、校内でホームルームの時間を利用して授業を行うことでみんなに差別について知ってもらい、一緒に差別について考える機会を作れば、より良い社会の形成に貢献できるのではないかと考えた。

私たちが目指す最終的な目標は、差別を「個人の問題」ではなく、「社会全体の問題」として捉え、多様な文化や価値観を尊重し合える社会の実現である。そのために、まずは身近なところから変えていくための具体的なアクションを起こし、少しでも多くの人が差別について考える機会を提供することを目指している。

5. 参考文献・資料

渡辺雅之（2021年）『マイクロアグレッションを吹っ飛ばせ～やさしく学ぶ人権の話～』
高文研

日本財団ジャーナル編集部. 2023年. “知らずに相手を傷つけてしまう言動「マイクロアグレッション」を防ぐには？専門家に聞いた 日本財団ジャーナル社会のために何が出来る？が見つかるメディア. 2024/06/12.

<https://www.nippon-foundation.or.jp/journal/2023/89893/education>, (2024-09-01)